

「ガンダーラ及び中央アジアの美術」

Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente e Museo Civico di Torino: "L'arte del Gandhara in Pakistan e i suoi incontri con l'arte dell'Asia Centrale. Catalogo della Mostra. Pp. 128+(1), 64 Pls. and 1 Map. Roma: Casa Editrice Carlo Colombo 1958.

榎 一 雄

イタリア中東亞研究所は、學術書及び定期刊行物の編輯刊行、關係圖書の蒐集、講演會・講習會・展覽會の開催などをその主要な事業としているが、一九五六年六月―八月のイラン美術展覽會に續いて、一九五八年六月にローマの同研究所でガンダーラ及び中央アジア美術展を開いた。この展覽會は引續き七月から九月までトリノでも催された。ここに紹介する目録によると、それはパキスタン政府の後援によつてラホ

ール中央博物館・ベンジャワール博物館・タキシラ考古博物館からガンダーラ美術の代表的作品七十點の出品を得、更にヘルリンの民族學博物館(イント部)(Museum für Völkerkunde, Indische Abteilung)及びバリのギメ博物館(ローマの國立東洋美術博物館(Museo Nazionale d'Arte Orientale)・イスレイ・ライアンズ(Islay Lyons)氏並びにローマの二つの個人蒐集の協力を得て、合計二百五十二點を陳列したものである。この中、ガンダーラ地方の出土品は石造品九十一點、土製品三十點。ガンダーラ美術の系統を引いているコータン・トムシュック(Tumshuq)・スウバシ(Subashi)・クチャ(キシル及びクムトラ)・シヨールチュック(Shorchuq)・ツルフアンからの出土品百十四點、敦煌畫十七點で、敦煌畫はギメ博物館の、コータン以下の出土品はヘルリンの民族學博物館の出品である。

目録は序説(pp. 25―70)・陳列品解説(pp. 73―121)・圖版・地圖の順序になり、ローマ大學教授マリノ・ブッサーリ(Marino Bussagli)氏の執筆編輯したものである。序説は歴史的基盤(クシャーナ、クシャーナと中央アジア、ササン朝の侵入とその影響、中央アジアの史的發展、共通の特色と結論)、宗教的基盤(佛教、マニ教、ネストール教、その他の潮流)、美術的様相、年代論と古典的〔美術の〕傳來、ガンダ

ーラ美術の影響の範圍——イラン—佛敎派、セリンディアの中心地方、陳列品中の佛敎關係の作品、書誌 (pp. 67—70) かなり、ホラズムやピヤンチケント等の發掘調査の結果などがとり入れられている點が目新しい。ガンダーラ美術の全體に互つて概説したよい手引が得られない今日、この目録の解説と寫眞とはそうした手引としても少からず役に立つであらう。

- (1) *Mostra d'Arte Iranica. Catalogo. Pp. 303+2, Pls. 3+114 Milano: "Silvana" Editoriale d'Arte 1956.* これはイラン以下世界の多くの國々からの出品によつて組織された大掛りな展覽會であつた。この目録の編輯者もブッサーリ教授である。しかし昭和三十三年五月—六月東京(それ以後大阪)で行われたベルジャ美術展は、數に於いてこそローマのそれと若干及ばなかつたけれども、内容に於いては遜色のないもので、殊に目録の解説はイラン美術の發展を歴史的に簡潔に説明している點で、少くとも私には前者より有益に感ぜられた。
- (2) ガンダーラの歴史・美術に關する論文著書の目録として Henri Deydier, *Contribution à l'étude de l'art du Gandhāra. Essai de bibliographie analytique et critique des ouvrages parues de 1922 à 1949.* Paris: Adrien-Maisonneuve 1950 があるが、ブッサーリ教授の書目にはこれ以後現われた論著が擧つていて、頗る參考になる。
- (3) トルストフ氏の古代ホラズム遺蹟の發掘はよく知られている

「ガンダーラ及び中央アジアの美術」 榎

が、ピヤンチケントの調査については、我が國では餘り喧傳されてはいないようである。ピヤンチケントはタヂキスタン北部、ザラフシャン河の流域で、サマルカンドの東方に當る町であるが、一九四六年以來、この町を中心に河の南北に散在している遺蹟の發掘調査が行われている。遺蹟は八世紀の中頃アラビア人の侵入によつて廢墟に歸したと信ぜられる都市で、イスラム支配以前のソグド人の歴史・文化の研究に極めて重要な諸種の遺物が發掘された。中でも、ソグド様式を傳える建築の遺構、壁畫、ソグド語文書、ソグド人の王統復原の手がかりになるソグド貨幣等の出現は、特筆に値する。その發掘はヤクボフスキイを長とするソグド—タチック調査團(後タチック考古調査團と改名)によつて行われ、一九五三年同氏の歿した後も續けられて、一九五五年に第十回の發掘が行われた。A. Kolpakov (Moskva, 30 Nov. 1955), *The Ancient Culture of the Sogdians. Archaeological Excavations in Pendikent (Bibliotheca Orientalis, XIII, 3/4, Mai-Juillet 1956, p. 176)* はこの第十回發掘の成果の概要の豫報であるが、それ以後の調査については聞く所がない。關係の報告や論著は、次に掲げる書誌の No. 4 の卷末 (p. 312—314) に一九四六一—五二年間のものが見え、更に「ソヴィエート考古學」(Sovetskaya Arheologiya) の卷末に出される「ソヴィエート考古學文獻」に各年度のもの詳しく出ている(但し第二十七卷(一九五七)に一九五三年度のものが出ているのが最も新しい)。ここには管

見に入つた最も主要なもののみを挙げる。

(一) 成果の概括的記述

- (1) A. Belentitsky, Excavations in Panjikent. Papers presented by the Soviet Delegation at the XXIII International Congress of Orientalists. Iranian, Armenian and Central-Asian Studies. Moskva 1954, p. 27—37, 38—47.

- (2) A. L. Mongari, Arkeologiya v SSSR. Moskva 1955, p. 286—291.

(ロ) 發掘報告

- (3) A. Yu. Yakubovskii, Trudy sogdisko-tadjikskoi arheologicheskoi ekspeditsii, Tom I, 1946—1947 gg. (Materialy i Issledovaniya po Arheologii SSSR, No. 15) Moskva-Leningrad 1950.

- (4) A. Yu. Yakubovskii, Trudy Tadjikskoi Arheologicheskoi ekspeditsii, Tom II, 1948—1950 gg. (Ibid., No. 37) Moskva-Leningrad 1953.

(ク) 壁畫に關する研究報告

- (5) A. Yu. Yakubovskii i M. I. D'yakonov, Jivopis' drevnego Pyandjikenta. Moskva 1954 (RC.: G. Glaesser in East and West, VIII, 1957, p. 199—215) [壁畫のテクニク、壁畫に現われているソング下人の宗教生活等に關する四つの論文を収録してゐる]

(二) 建築に關する研究報告

- (6) V. L. Voronina, Gorodishche drevnego Pyandjikenta kak istochnik dlya istorii zodchestva (Arkhitekturnoe Nasledstvo, 8, Moskva 1957, p. 115—142)

(ホ) 貨幣に關する研究報告

- (7) O. I. Smirnova, Monety iz raspokov drevnego Pyandjikenta (1947 g.) No. 3. p. 224—231.

- (8) Do., Sogditskii money kak novyi istochnik dlya istorii Srednei Azii (Sovetskoe Vostokovedenie, VI, Moskva-Leningrad 1949, p. 356—367.

- (9) Do., Sogditskie money sobraniya numizmaticheskogo otdela gosudarstvennogo. (Epigrafiika Vostoka, IV, 1951, p. 1—23)

- (ロ) Do., Materialy k svodnomu katalogu sogditskikh monet. (Epigrafiika Vostoka, VI, 1952, p. 1—45)

- (四) Do., Monety drevnego Pyandjikenta (Kratkie soobshcheniya……Instituta istorii Material'noi kul'tury, 55, 1954, p. 48—51).

- (チ) ひたひた中田兼衛氏に關するハ・マラーニ教授の近作の何れかを引いたる特色がある。

(東京大學教授・東洋文庫研究員)